

このマーク(複十字)は、
世界共通の結核予防運動の
旗印です。

No.
417
2024.7

結核・肺疾患予防のための 複十字

みんなで育てる、結核のない世界

活動期間 **8.1^木 ~ 12.31^火**
募金は随時受け付けています。

複十字シール運動

世界で結核を発病する人

約 **1,060**
万人
(2022年)

世界で結核により
死亡した人

約 **130**
万人
(2022年)

日本で結核を発病する人

10,235人
(2022年)

日本の結核患者の4割は

80歳
以上
(2022年)

結核を知って、
結核のない未来を
育てよう



複十字シール運動
イメージキャラクター
シールぼうや



複十字シールには、
健康を願うメッセージが込められています

複十字シール運動は、結核のない世界をつくる運動です。
その実現のために募金活動と普及啓発活動を行っています。

結核をなくすため、複十字シール運動にご協力をお願いします!



総裁秋篠宮皇嗣妃殿下
ご動静

結核予防会お成り

令和6年4月15日／結核予防会（東京都千代田区）

令和6年4月15日は、公益財団法人結核予防会総裁奉戴30周年の記念の日です。当日、総裁秋篠宮皇嗣妃殿下が結核予防会本部ならびに総合健診推進センターにお成りになりました。



本部事務職員6名と御懇談
職員は、自らの業務や課の課題などをご説明しました

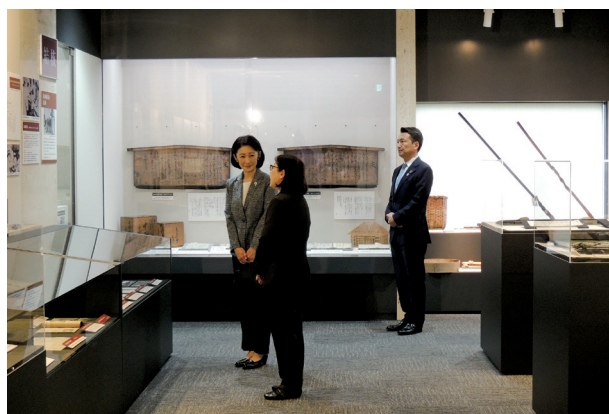


総合健診推進センター事務職員および医療職員5名と御懇談
健診センターでの事務や検査やデータ管理などをご説明しました

清瀬市郷土博物館常設展示歴史展示室「結核」 ご観覧

令和6年4月30日／清瀬市郷土博物館（東京都清瀬市）

総裁秋篠宮皇嗣妃殿下は、東京都清瀬市の郷土博物館常設展示歴史展示室「結核」をご観覧になりました。清瀬市の歴史や結核の療養所跡地から出土した患者の生活用品等の展示物をご観覧になりました。



妃殿下は、郷土博物館ご訪問の後、結核医療ゆかりの地（清瀬病院記念碑、外気舎記念館、東京都立清瀬小児病院跡地、結核研究所附属療養所跡地）を、結核予防会の職員とご一緒にお訪ねになりました。



副理事長兼専務理事就任にあたって



結核予防会

副理事長兼専務理事 前田 秀雄

このたび伝統ある結核予防会の一員になりましたことと大変光栄です。東京都保健所や都庁の結核対策所管部門で勤務を重ねた経験を踏まえ、今後の結核対策の課題について述べさせていただきます。

外国人結核対策

初めて都庁の結核担当課に所属した直後の1988年6月、朝日新聞に「アジア人留学生結核多発 日本語学校で検診、発見率400倍」というセンセーショナルな記事が掲載され、外国人結核対策本格化の契機となり、全国に先駆けての日本語学校結核検診や通訳制度の実施などの都の事業に関わってきました。労働環境の変化から、対策の重要性はますます高まると予想され、結核予防会としても入国前結核スクリーニングの基盤整備等対策の強化を支援してまいります。

高齢者結核

昨年まで在職していた東京都北区には、高度成長期に集団就職された方たちが多く居住され、高齢、独居、貧困で友人関係も少ない方が結核が重症化してから発見される事例に少なからず遭遇しました。既感染

率が低下しつつありますが、社会的支援の少ない高齢者の方たちの結核対策は、近年の経済状況からその必要性は決して低くなっていないと考えられ、結核予防会としても自治体の対策に協力してまいりたいと考えます。

国際協力

1990年に結核研究所国際研修に参加して途上国の医師とともにグローバルな結核対策を学び、また、東京都の事業でアジアの首都都市と結核対策について討議してまいりました。結核予防会としても経済発展著しい一方でいまだ罹患率の高い各国と協力し、世界の結核根絶を目指すEnd TB Strategyに寄与して参りたいと考えます。

おわりに

結核予防会は日本及び世界の結核対策強化のためのかけがえのない存在であるため、対策の充実とともにその使命を全うするための経営基盤の強化にも尽力してまいりたいと考えております。

ご支援の程よろしくお願い申し上げます。🍵

Contents

■メッセージ

副理事長兼専務理事就任にあたって 前田秀雄…… 1

■役員人事

結核予防会役員人事(6/20)付 …… 2

■APRC2024 報告

第9回アジア太平洋地域 UNION 会議 (APRC UNION) 2024 Taipei, Taiwan “Shaping a safer world through high-quality holistic healthcare” 大角晃弘…… 3

■結核対策活動紹介

日本語学校に対する効果的な結核教材の開発：漫画を用いた健康教育活動への挑戦 田辺香苗…… 4

■教育の頁

ヒトは60歳を過ぎると結核を発病しやすくなるか 太田正樹…… 6

■世界の結核研究の動向(41)

日米医学協力計画 抗酸菌症専門部会 日米合同会議2024に参加して 土方美奈子…… 8

■世界の結核事情(44)

富士フィルムによる携帯型X線撮影装置を活用した結核検診活動とインドでの事例 道場弘貴……10

■TBアーカイブだより(2024年7月)

痰壺省令から始まった結核対策 青木純一……12
鹿児島県薩摩川内市の平佐焼の「痰壺」の寄贈に際して 佐藤和美……13

■ずいひつ

結核と「私」 増田國次……14

■ミャンマーコミュニティと連携した結核健診・健康相談会の取り組み

李祥任……15

■北里柴三郎博士・新紙幣発行記念

明治村北里研究所本館・医学館内展示パネルリニューアル・トークセッション開催 光野利枝子……16

▽予防会だより・シールだより

- 令和6年度高額寄附をいただいた方々からのメッセージ ……17
- 2023年度複十字シール運動報告 佐藤奈津江……18
- 尾身理事長著書科学ジャーナリスト賞優秀賞受賞 ……20
- 第27回秩父宮妃記念結核予防功労賞世界賞受賞者のご紹介 ……20
- 石川県支部に胸部検診車(宝くじ号)導入
- 禁煙ポスターのご案内
- 令和6年度複十字シール～自然との調和～

役員人事

去る6月20日開催の全会評議員会及びその後の理事会におきまして、下記のとおり役員が選任され、新たな決意のもとそれぞれ就任いたしました。

つきましては、この陣容をもちまして全会の基本方針であります「結核対策」「国際協力」「呼吸器疾患対策」「生活習慣病対策」を4つの柱に国民の健康増進に寄与すべく精励いたす所存でございますので、今後ともなお一層のご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

評議員会会長	森 亨	結核研究所名誉所長
評議員会副会長	河面 孝	大阪府結核予防会理事長
評議員会副会長	笹井 敬子	東京都結核予防会理事長
評議員	稲垣 精二	第一生命保険株式会社代表取締役会長
評議員	木下 幸子	全国結核予防婦人団体連絡協議会会長
評議員	笹本 洋一	日本医師会常任理事
評議員	中野夕香里	日本看護協会専務理事

理事長・代表理事	尾身 茂	
副理事長・専務理事	前田 秀雄	
執行理事（総務部長）	前川 眞悟	
執行理事（国際部長）	岡田 耕輔	
執行理事（結核研究所所長）	加藤 誠也	
執行理事（複十字病院院長）	大田 健	
執行理事（新山手病院院長）	横倉 聡	
執行理事（保生の森施設長）	木村 幹男	
執行理事（総合健診推進センター所長）	宮崎 滋	
理事	中島 正治	元厚生労働省健康局長
監事	松尾 邦弘	弁護士
監事	山本 嶋子	公認会計士

なお、このたび本評議員会をもちまして、評議員釜范敏、理事（代表理事）工藤翔二、理事（専務理事）羽入直方、理事小林桂雄、理事（事業部長）小林典子が退任いたしました。

第9回アジア太平洋地域 UNION 会議 (APRC UNION) 2024 Taipei, Taiwan “Shaping a safer world through high-quality holistic healthcare”



結核研究所臨床疫学部
部長 大角 晃弘

2024年4月26日から29日までの4日間、第9回アジア太平洋地域 UNION (APR UNION) 会議が、台湾肺急性疾患医療学会と共催して、台北市で開催されました。APR UNION 会議は、1年おきにアジア太平洋地域のメンバー国による持ち回りで開催されており、前回は2022年に、香港が主催して開催されました。今回は、COVID-19の世界的大流行後初めての現地開催で、台湾での開催も初めてです。会議には、台湾国内からの参加者約1,200人と、31カ国の海外からの参加者約230人が参集しました。

今回の会議においても、結核対策（診断・治療・結核菌検査・HIV感染症その他の疾患が合併する結核・多剤耐性結核の診断と治療・LTBI診断と治療・移民における結核等）に関わる最新情報を中心に、肺非結核性抗酸菌症の診断と治療、COVID-19の世界的大流行の結核対策への影響、肺真菌症の診断と治療等の肺感染症対策、慢性閉塞性肺疾患（COPD）・喘息・間質性肺炎・肺悪性腫瘍・睡眠時無呼吸症候群等の非感染症疾患の診断と治療についての最新の知見、たばこ対策や大気汚染に関する最新知見、台湾における Universal Health Coverage (UHC) 導入の歴史等、呼吸器疾患に関わる幅広い公衆衛生分野・医療分野の現状と課題についての情報提供と意見交換とが行われました。

HIV合併結核についての台湾からの発表では、2017年から2023年の間に年間2,000人以上のHIV感染者が新たに登録されていた状況から、半分未満の登録者数に減少した状況が発表されて、新感染者発生抑制のためには、抗レトロウイルス薬の普及が重要であることが強調されていました。2023年の台湾における人口10万対年間結核患者届出数は28人まで減少してきており、近いうちの結核低蔓延状態が見えてきています。台湾では、全国6地域の基幹病院に多剤耐性結核協議会（Taiwan MDR-TB consortium, TMTC）を設置し、多剤耐性結核医療の専門家による地域内の多剤耐性結核医療の評価を行っており、最新の情報では、台

湾全体の多剤耐性結核患者の治療6か月後の菌陰性化は90%、治療2年目における治療成功率は70%、治療中断者なし、と報告されていました。全体会議の一つに、地球温暖化をもたらす二酸化炭素排出を医療領域においても抑制する施策についての発表があり、喘息やCOPD治療で使用する吸入薬の選択においても、より二酸化炭素排出が少ない薬品を選択する必要があることが勧められていたのは、筆者にとって新鮮な情報でした。

入国前健診の方法について、最近米国が方針を変更し、3歳以上の米国滞在希望者全員を対象にインターフェロンガンマ遊離試験（IGRA）を実施することとなったことが報告されました。今後、「潜在性結核感染症（LTBI）」について、成人を含めた入国前結核健診の対象とすることの有用性についての情報が報告されることになろうかと思います。我が国は、今年度中に6カ国を対象とする入国前結核健診を導入する段階ですので、米国による成人を含めたIGRAによるLTBIスクリーニングの有用性について、治療結果も含めて情報収集する必要があります。

次回2026年のAPR UNION会議の開催地はタイのバンコクです。本会議は、アジア太平洋地域の結核・呼吸器専門家が参集し、少しでも結核や呼吸器疾患のないアジア太平洋地域を目指して、有効な方策を共に考える会議として、今後も貴重な機会となろうかと思っています。🐼



APR UNION 会議主催者・APR UNION 執行部関係者と（中心後ろ筆者）



川口市保健所疾病対策課

課長補佐兼感染症係長

田辺 香苗

はじめに

川口市（以下、本市）は、2018年に中核市に移行し保健所を開設した。2018年の本市の結核罹患率は17.2（人口10万対）で、国（12.3）や県（11.7）よりも高く、どうにかしなくてはいけないという保健師の思いは強かった。

保健所開設当初は、感染症業務を経験した保健師は少なく、手探りの状態で結核対策がスタートした。外国出生者対策として新規の予算を計上し、2020年に事業をスタートさせようとしたところで、新型コロナウイルス感染症のパンデミックに襲われた。その中でも、保健師の思いを引き継ぎながら、外国出生者への結核対策を展開してきたので、その活動を報告する。

川口市保健所の結核新登録患者の特徴

本市の総人口は607,279人（2024年4月1日時点）、そのうち外国人は44,441人で7.3%を占めている。2023年6月の法務省統計「在留外国人総数上位100市区町」では、第3位となっている。結核患者の中で外国生まれの占める割合（表1）は、2023年は21.2%（暫定）と非常に高く、2018年から高い割合で推移している。2022年は7%と少ないが、これは新型コロナウイルス

感染症による留学生の減少、受診控えなどが影響しているのではないかと考えている。年代別外国生まれの患者が占める割合（表2）は、日本生まれは高齢者、外国生まれは20～30歳代の若者（日本語学校留学生や技能実習生など）が多いという特徴がある。

日本語学校に対する健康教育までの経緯

本市の特徴から外国出生者に対する結核対策は最重要課題であり、コロナ禍でも市内の日本語学校の状況把握、特定技能実習生監理団体との情報共有等を積極的に進めてきた。

2021年度はコロナ禍にあり、学校が個別健診として病院に受診が出来ない状況でもあったため、外国出生者への結核対策の第一歩として、「日本語学校に対する集団健康診断と健康教育」を実施した。その際に、生徒へのアンケート結果から結核の知識や理解の不十分さが明らかとなり、ハイリスク者である外国出生者への対策が急務であることが浮き彫りとなった。

そこで2022年度は、前年度に集団健康診断を実施した日本語学校のうち、健康管理に対して積極的な姿勢を示していた学校の教員と生徒をターゲットに、保健師自らが描いたオリジナルの漫画を用いて、結核の基礎知識の普及啓発とセルフケア力の向上を目的とした健康教育を企画した。

日本語学校での漫画を用いた健康教育への挑戦

対象者は、小学校中学年から高学年レベルの言語能力がある中国籍の生徒12名とし、30分の教育を1回行うこととした。初めての試みであったため、敢えて日本語力の高いクラスを対象とした。教員との打ち合わせで、「とにかく飽きずに聞いてもらえる事、少しでも興味を持ってもらう事から理解につなげる」ことを目標にした。日本の漫画を日常的に好んで読んでいるとの情報に着目し、教育媒体のメインをオリジナルの漫画とすることに決定した（図1）。初めは消極的だった教員も、オリジナル漫画の制作が進み出すと、結

罹患率	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年※
全国	12.3	11.5	10.1	9.2	8.2	
県	11.7	10.7	9.2	8.4	7.6	
市	17.2	15.2	15	14.8	14.2	10.9
日本生まれ集数(罹患率)	83(14.6)	80(14.1)	78(13.7)	76(13.4)	80(14.1)	52(9.2)
外国生まれ集数(罹患率)	20(60.1)	12(33.3)	13(33.5)	14(35.9)	6(15.8)	14(35.4)
外国生(%)	19.4	13.0	14.3	15.6	7.0	21.2

※暫定

表1. 川口市の罹患率・外国生まれの占める割合

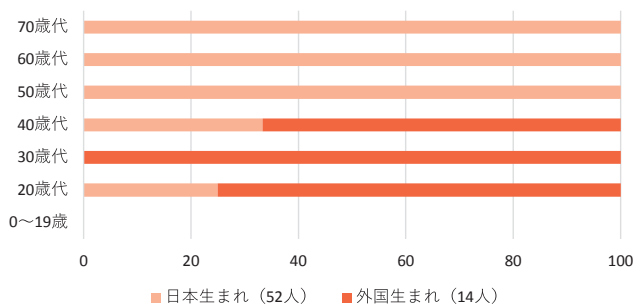


表2. 年代別外国生まれの患者が占める割合（2023年）



図 1. オリジナル漫画

核の質問や教育の進め方に対する細かな提案も出てくるようになった。今回、媒体をオリジナルにこだわった理由は、「日々の保健師活動の中での気づきや思いを伝えたい、また反映させた形で発信したい」という強い思いがあったためである。

媒体の工夫は、我々の取り組みの本気度に共感や賛同を得る大きなきっかけとなり、ゴールを共有でき信頼関係を強固なものとし、教員の意識の変化をもたらす結果につながったものと評価している。

健康教育の実際と評価

健康教育は、結核について興味を持ってもらうことを狙いとして、予め事前学習として、結核の知識を問うアンケート記載と、漫画の前半部分のみを授業の中で読んでもらうこととした。当日は、漫画を1ページずつスクリーンに映し、生徒たちの集中力とイメージの鮮明さや没入感を高めることを期待して、後方に着座した4人の保健師が効果音等も加えながら朗読をするスタイルを取った。

生徒たちの媒体への興味は良好であった。事後アンケート結果でも、身近な漫画が教材になった事で、記憶に残りやすくなったり、結核への興味が湧いたり、期待した教育効果は概ね得られたものと評価した。また、「結核はしっかりと薬を飲めば治る病気である」など、10のキーメッセージ（図2）の○×を生徒に確

認したところ、12名中11名が全問正解であり、構成や媒体を工夫した事で、結核の基礎知識を効果的に伝えられたこと、セルフケア力の向上を促すきっかけを作ることができたと評価した。一方で教員からは、興味は引き付けられたものの、ストーリーに関心が向きすぎてしまい、理解の定着に不十分さがあったと言う手厳しい意見もあった。短い時間設定と1回の講義の中で行える教育の限界も感じたが、率直な意見が出たことは、重ねてきた話し合いの数だけ信頼関係も強固となり、保健師の結核対策への思いに理解と協力への賛同を得られたと前向きに評価をした。

考察

日本語学校に対する健康教育は、今回が初めての試みであった。実現化することが出来たのは、感染症の知識があり、かつ漫画制作が得意な保健師がいたこと、効果的な演出等においても、皆で知恵や意見を出し合い、最大限の教育効果をあげるべく妥協せずに追及した成果だと考えている。一から手作りした今回の経験は、「どうしたらやれるか」という追及、「持てる力を出し合って協力する」というチームワークが大事である事に改めて気づかされたと共に、「やればできる」という大きな自信にもつながった。

今後の取り組み

2023年度は、3か語（中国語、タガログ語、ネパール語）の音声動画の漫画を作成し、別の日本語学校で健康教育を実施した。10のキーメッセージで評価したところ理解度は高かったことから、今後も評価指標として使用する予定である。

今年度は、漫画の内容を一部変更し、動画の有効な活用方法を検討中である。作成した漫画の多言語翻訳や動画化などは、本市の外国人支援担当課とタッグを組んで取り組んでいる。さらに日本語学校教員や監理団体への健康教育、外国出生者のコミュニティに詳しい支援者と連携を目指す「草の根の活動」なども予定している。外国出生者への結核対策は、さまざまな課題があるため、今後も柔軟な発想と保健師魂を抱えて地域に根差した活動を展開していきたい。🐱

10のキーメッセージ

- 1 アジアでは、結核がはやっている。
- 2 結核は空気中の結核菌を吸い込んで感染する。
- 3 結核菌に感染してもはじめは元気なので、結核に感染したことには気づかない。免疫力が弱り結核菌が増え、症状がでてくる。
- 4 なれない生活習慣や生活リズムの乱れは、ストレスになる。
- 5 ストレスが多い生活は免疫力が低くなり、結核にかかりやすくなる。
- 6 結核の症状は、咳・痰・発熱・疲れやすい・食欲低下など、風邪の症状によく似ている。
- 7 風邪のような症状が2週間続くときは、我慢しないで病院に行くことが大切である。
- 8 結核はしっかりと薬を飲めば、治る病気である。
- 9 結核は早くみつかれば、他の人にはうつらない病気である。見つかるのが遅くなると、他の人にもうつしてしまう危険がある。
- 10 結核の不安は、保健所や学校の先生に相談する。

図 2. 10のキーメッセージ

ヒトは60歳を過ぎると結核を発病しやすくなるか

結核研究所

対策支援部長 太田 正樹



(1) 背景

“結核既感染者が高齢になると結核を発病しやすくなるか？”は、現在でも議論がある命題である。Comstock（1975）は当時の限られたデータから出生コホート分析を行い、ヒトは加齢とともに結核罹患率が低下することを報告した¹。一方、Steadら（1983）は年齢階層別結核罹患率と年齢階層別ツベルクリン反応（ツ反）陽性率から、60歳以降、結核発病リスクが上昇すると推定した²。我々は本邦における1950-2020年までの70年分の出生コホート別年齢階層別結核罹患率を用い、60歳以降に結核罹患率が上昇するかを検討した。

(2) 方法

1950-2020年の10年毎の結核動向調査データを用い、10歳刻みで9カテゴリに分けて（0-9歳、10-19歳、20-29歳・・・、80歳以上）年齢階層別結核罹患率を計算し、出生コホート別にY軸を指数化したグラフを描画した。詳細は過去の文献を参照したいが^{1,3}、簡単には1941-1950年出生者の結核罹患率は、1950年統計で0-9歳、1960年で10-19歳、1970年で20-29歳・・・、2020年で70-79歳の年齢階層に計上されるため、出生コホート別年齢階層別にデータを再構成した。

(3) 結果

図（上）に男性の1881-1890年から1991-2000年出生者の12出生コホート別年齢階層別結核罹患率を示す。年齢階層別結核罹患率のピークは若年（多くは20-29歳、一部は0-9歳または10-19歳）であり、20-29歳以降は60-69歳ないし70-79歳まで連続的に罹患率が低下した（1911-1920、1921-1930、1931-1940、1941-1950及び1951-1960年の5出生コホート）。一部出生コホート（1891-1900及び1901-1910年の2出生コホート）では60-69歳ないし70-79歳において罹患率のピークを認めた。女性（**図下**）でもその傾向は全く同様であった。

(4) 考察

本研究は、結核動向調査データを用い、出生コホート別年齢階層別結核罹患率を検討した。現在まで、70年分のデータを用いた出生コホート分析報告はない。本研究は結核動向調査データを用いており、その結果は代表性が高く、選択バイアスなどの可能性は低い。多くの出生コホート（1911-1960年の5出生コホート）で、年齢が50-59歳から60-69ないし70-79歳に上昇する際に罹患率低下を認め、結核既感染者は加齢により必ずしも結核発病リスクが上昇しない。これは、結核発病リスクは結核感染後1-2年以内が最大であり、その後新たな感染がなければ、発病リスクが下がるためと考えられる。前出のComstock¹や同時代のHinman³からも同様の報告をしている。一方、Steadらは相反する報告をしている²が、これはSteadらがツベルクリン反応（ツ反）陽性者を結核感染者と見なして分母とし、結核既感染者における発病リスクを評価したためと考えられる。高齢者では細胞性免疫の低下に伴い、ツ反陽性率が低下し⁴、分母となるツ反陽性者数が減少し、そのため結核既感染者における発病リスクを過大評価したためと考えられる。

一部出生コホート（具体的には1901-1910及び1911-1920年出生コホート）では50-59ないし60-69歳の年齢階層において結核罹患率のピークを認めたが、太平洋戦争末期及び戦後の混乱期の人口移動により結核感染の機会が増加し、特に1951年は結核罹患率が過去最高（人口10万人あたり698）であった。それ故、特定の年齢階層でそのしばらく後に結核罹患率のピークを認めた可能性が考えられる。

男性の1921-1930及び1931-1940年出生者及び女性の1931-1940年出生者のいずれも80歳以上の年齢階層では、70-79歳よりも結核罹患率が上昇している。「80歳以上」の年齢階層は文字通り80-89歳と90歳以上の結核罹患率が含まれており、90歳以上の者は当該出生

コホートではなく、10年早い出生コホートに含まれるべき者である。彼らの高い結核罹患率が80歳以上の年齢階層の結核罹患率を押し上げ、過大評価となった可能性が考えられる。

本稿は筆者らのグループの論文⁵を筆者の責任により要約したものである。原典論文の作成に当たっては、結核研究所臨床疫学部内村和広氏、対策支援部平尾晋氏の助力を得た。厚く御礼を申し上げます。🐱

参考文献:

1. Comstock GW. Frost revisited: modern epidemiology of tuberculosis. Am J Epidemiol 1975;101:363-382.
2. Stead WW, Lofgren JP. Does the risk of tuberculosis increase in old age? J Infect Dis 1983;147:951-955.
3. Hinman AR, et al. Changing risks in tuberculosis. Am J Epidemiol. 1976;103:486-497.
4. Hogberg NS, et al. The complexity of diagnosing latent tuberculosis infection in older adults in long-term care facilities. Int J Infect Dis. 2016;44:37-43.
5. Ota M, et al. Lower TB notification rates in later life in the same birth cohort, Japan, 1950-2020. Int J Tuberc Lung Dis. 2024;28:157-159.

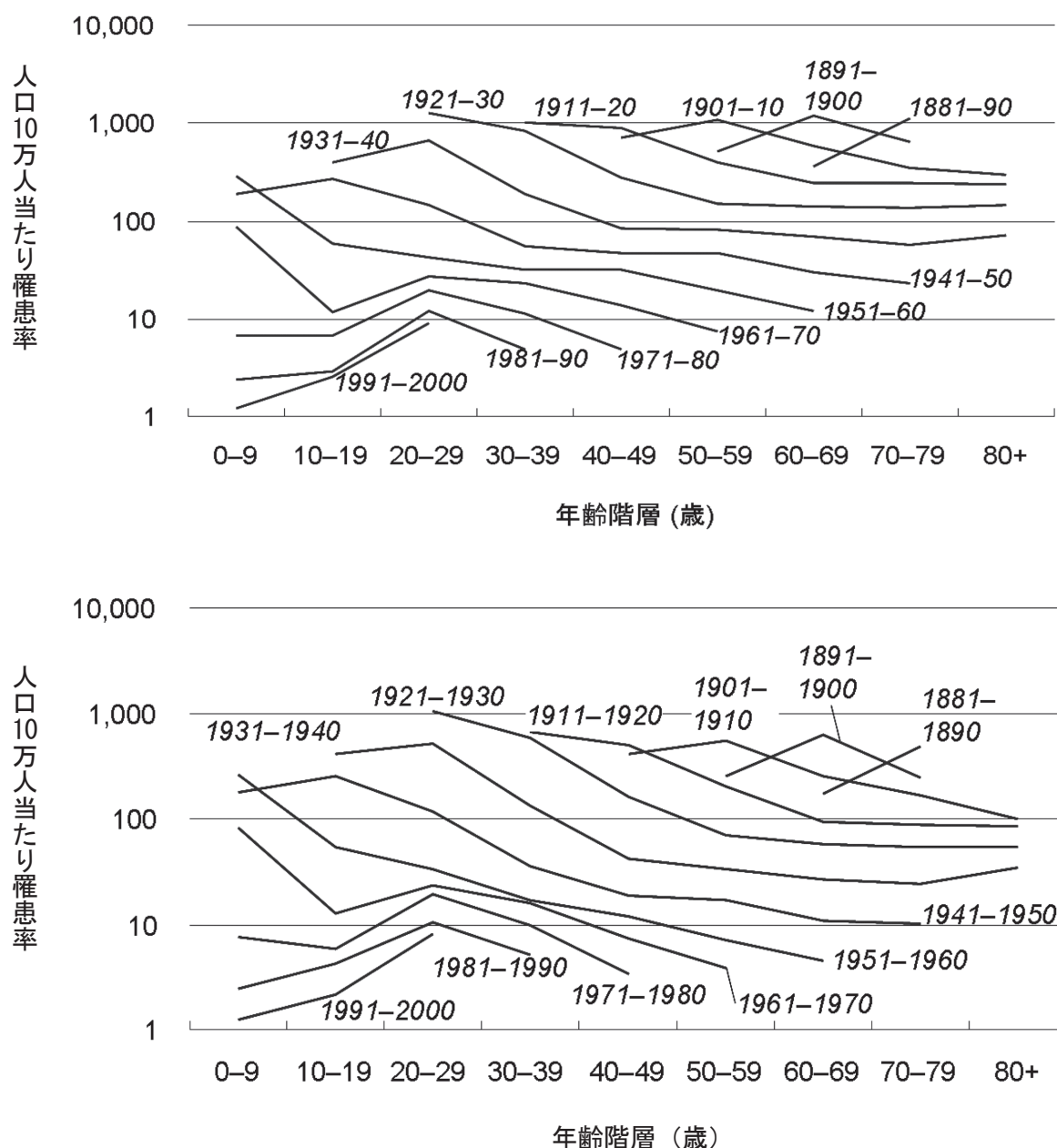


図. 出生コホート別年齢階層別結核罹患率の推移（上：男性、下：女性）、日本、1950-2020

日米医学協力計画 抗酸菌症専門部会 日米合同会議2024に参加して

結核研究所

生体防御部長 土方 美奈子

はじめに

2024年（令和6年）4月25日から26日にかけて沖縄で開催された日米医学協力計画 抗酸菌症専門部会 日米合同会議2024に参加いたしましたので、報告します。

日米医学協力計画の歴史は古く、1965年、当時の日本の佐藤栄作総理大臣と米国のジョンソン大統領の共同声明に基づいて始まり、日米両国が共同でアジア地域にまん延する疾病に関する研究を進めることを目的にしています。結核は当初から部会の一つで、結核予防会名誉顧問・結核研究所名誉所長であられた島尾忠男先生は日米医学協力計画に長年多大な貢献をされ、特に1990年代後半を中心に7年間にわたって疾患別の複数の部会を束ねる親委員会の日本側の委員長としてリーダーシップを発揮されました。現在の日米医学協力は、ウイルス、エイズ、肝炎、寄生虫、急性呼吸器感染症、抗酸菌症、コレラ及び細菌性腸管感染症、免疫、がん、栄養・代謝の10の部会から成り、抗酸菌症部会では松本壮吉教授（新潟大学）が日本側の部会長、Sabine Ehrt教授（Weill Cornell Medical College）が米国側の部会長をされています。

抗酸菌症専門部会日米合同会議は、2018年の新潟大学での第52回会議、2019年のベトナム ハノイでの汎太平洋新興再興感染症国際会議（EID会議）との同時開催の後、2020年に沖縄での開催が予定されていましたが、COVID-19パンデミックのため中止になりました。今回2024年は久しぶりの日本国内での現地開催となり、琉球大学の梅村正幸先生が大会長を務められました。会場は、那覇市の中心街から離れた琉球大学の広大な千原キャンパスの一角にあり、米国から5人のパネルメンバー、日本側は5人のパネルメンバー、部会員、ほか多数の研究者の参加のもと、23題の口頭発表（結核9、非結核性抗酸菌症9、ハンセン病2、そ

の他3）、2つの特別講演、ポスター10題の発表があり、非常に活発な討論が行われました。

結核研究の話題

結核についての9題の口頭発表は、それぞれ独自の切り口から結核の病態解明、新しい治療法やワクチンの開発につながる成果を目指す基礎研究でした。3題が結核マウスモデルを基盤にした結核菌感染における宿主応答の研究成果で、米国側からは、Sabine Ehrt博士の潜在性結核感染症を模したマウスモデル系を用いた詳細な宿主応答の解析結果の発表と、Rhea Coler博士（The University of Washington）からの実験室でのマウスを用いた基礎的な研究結果を結核ワクチン開発の臨床試験につなげる試みについての発表がありました。日本からは結核研究所生体防御部の瀬戸真太郎免疫科長が、結核菌感染C3HeB/FeJマウスを用いた肉芽腫の解析を発表しました。宿主応答については上記3題の他に、大阪大学山崎晶博士から抗酸菌に対する自然免疫型T細胞応答の研究、結核研究所慶長直人副所長からベトナムとの国際共同研究による結核菌リファンピシン耐性変異と結核患者全血液RNA発現の関連の報告がありました。結核菌側に焦点をあてた研究としては、米国側からMichael Glickman博士（Memorial Sloan Kettering Cancer Center）から銅の欠乏に対する抵抗性に関わる結核菌の遺伝子群の研究、Christina Stallings博士（Washington University School of Medicine）から結核菌の呼吸代謝阻害薬とイソニアジド耐性の関連についての発表があり、日本側からは新潟大学の西山晃史博士からの結核菌の休眠誘導に関わるMDP1の研究、国立感染症研究所の森茂太郎博士から天然化合物ライブラリーから得られた抗結核菌活性を示す化合物についての発表がありました。結核研究において、まだ未解明で重要な研究課題が多くあることを示す、多彩な内容でした。特に

Stallings博士の研究室の仕事は、今回発表のあったような結核菌の基礎的な研究だけでなく、宿主応答の研究でも世界のトップレベルで、病原体と宿主の研究が密接に関連しながら進展していく感染症研究の一つの理想の形のように感じられました。

非結核性抗酸菌症、その他の話題

今回の会議では、非結核性抗酸菌症の発表演題が9題あり、米国側からは、Miriam Braunstein博士 (University of North Carolina) から、バクテリオファージを用いた *Mycobacterium abscessus* 症の治療の可能性についての発表がありました。紙面の関係で、日本側の非結核性抗酸菌症8演題、その他の4演題のご紹介はできませんが、結核研究とともに、非結核性抗酸菌症、ハンセン病、その他の細胞内寄生菌の研究が幅広く、互いに関わりあいながら進展している様子を感じる構成でした。

現在、そして今後の抗酸菌研究

抗酸菌症部会の事務局を担当しているアメリカ国立アレルギー・感染症研究所 NIAID の Susana Mendez 博士から、米国 NIAID の抗酸菌研究支援の戦略についての紹介がありました。(1) 結核菌と宿主の相互作用に関する基礎研究、(2) 様々なワクチン関連プログラムを通じて、研究室の成果と臨床を結びつけること、(3) 結核診断の改善が急務となっている結核高蔓延国において、結核の早期診断法および新規診断法の評価を行うこと、(4) 結核治療薬新規レジメン開発と治療期間短縮のためのコンソーシアムという4つのミッションが重点課題として挙げられ、基礎研究と臨床への橋渡しの両面で研究の充実の必要性が強調されました。同時に、NIAID は肺非結核性抗酸菌症への関与も増大させる意向で、鑑別診断、より良い治療法、疾患モデルの理解の向上などが挙げられていました。アメリカ国立衛生研究所 NIH は、外国人研究者に NIH

での研究の機会を提供する NIH Visiting Program、低・中所得国との連携を目指す International Research in Infectious Diseases (IRID) も推し進めており、今後は二国間から多国間の共同研究へのさらなる発展も期待されています。若い研究者、女性研究者の育成も強調していました。2023年から米国 NIH の第17代所長は Monica M. Bertagnoli 博士、NIAID 所長は Jeanne Marrazzo 博士となり、両組織ともトップが女性となったことも紹介されました。

部会長から、抗酸菌症専門部会のホームページが開設されたことの紹介もありました (<https://www.mycobacteria-usjcm.org/>)。NIAID の戦略からの共同研究への発展など、米国・日本・アジアの研究者間の交流を促進し、効率的な抗酸菌制御が行われることを目指して、抗酸菌研究に関わる様々な情報が掲載されています。

日本においても、若手や女性を含む全ての抗酸菌研究者がより一層充実した研究ができるよう、非常に熱意に満ちた会議であったことを、本稿で少しでもお伝えできれば幸いです。🐼



参加者集合写真

富士フィルムによる携帯型 X 線撮影装置を活用した結核検診活動とインドでの事例

富士フィルム
ガバメントリレーションズ推進部
マネージャー 道場 弘貴

富士フィルムグループは「事業を通じて社会課題の解決に貢献する」という使命を果たすべく、事業活動を進めています。近年では特に、結核の終息に向けて、小型の携帯型 X 線撮影装置の提供を通じて、開発途上国における結核検診の支援活動に注力しています。

開発途上国では、医療機関が不足していることに加え、交通インフラなどが十分に整備されていない場合が多く、特に都市部以外に暮らす人たちは検査や治療へのアクセスが制限されています。医療現場では検査機材が不足しているほか、診断技術・知見が不十分な場合もあり、仮に検査を受けられたとしても、正しい診断がなされず、病気が見逃され適切な治療につながらないケースもあります。結核は「早期の発見・治療で治癒が可能な病気」ですが、必ずしもそうした認識が広まっていないことも課題の一つです。

富士フィルムグループでは、小型・軽量で持ち運びがしやすく、操作も簡単な携帯型 X 線撮影装置を製品化しています。本装置を活用することで、開発途上国の、特に山間部や離島などの僻地に住む人々に結核検診の機会を届けられると考えています。

携帯型 X 線撮影装置 カセット DR 小型拡張ユニット モバイルコンソール



富士フィルム製の携帯型 X 線撮影装置および関連機器

本装置は、2019年の「第7回 アフリカ開発会議 (TICAD7)」の併催イベント「日本・アフリカビジネスフォーラム」で各国首脳・保健省大臣から、開発途上国での結核検診用 X 線装置として注目されました。その後、Stop TB Partnership の「TB Reach プログラム」などを通して、パキスタン、ザンビア、ベトナム、アゼルバイジャンなどで本装置を活用した結核検診の実証実験を行いました。

その結果、本装置の結核検診における有効性・有用性が認められ、2021年に Stop TB Partnership より新たな結核検診手段として推奨されることとなりました。さらに WHO は、専門医が少なく人的リソースが

足りない国では、胸部 X 線画像に AI 技術を用いてその場で結核発病疑い者を見つけることを推奨しています。当社は AI 技術を活用したアプリケーションの提供を通して、撮影したその場で解析結果を確認することを可能にしています。

富士フィルムグループではこれらの実績を踏まえ、WHO をはじめとした公的機関、民間の支援団体などと連携しながら、開発途上国において、本装置の提供を通じた結核検診の拡大をサポートしています。

こうした活動の中で近年最も注力しているのが、年間の新規罹患者が全世界のおよそ4分の1を占めるなど、深刻な状況が続くインドでの結核検診です。当社の現地法人 FUJIFILM India Private Limited は、2025 年までに結核を終息するというインド政府の計画を踏まえ、現地で結核検診を実施している州政府や医療機関、The UNION（国際結核肺疾患予防連合）、Stop TB Partnership と連携し、2021 年から当社の携帯型 X 線撮影装置による結核検診をインド各地で行っています。

2021 年に実施した第1フェーズでは、車内に X 線撮影室を備えた検診車でデリーやコルカタなど27都市を訪問し、これまで結核検診の機会を十分に得られていなかった地域の人々約1万2千人に対して X 線検査を行いました。撮影画像の読影時には、AI 技術を用いて開発された診断支援ソフトウェアの導入により、医師の診断をサポートし、結核の疑いがあると診断された被検者については、その場で喀痰を採取し、現地の医療機関で検査を実施しました。その結果、第1フェーズを通じて125人が陽性と診断され、医療機関で治療を受けました。

2022年9月から実施した第2フェーズでは約100万人の人々に結核検診の啓発活動を実施し、そのうち約3万人に対して X 線検査を行いました。携帯型 X 線撮影装置を搭載した車両3台がグジャラート州、ケララ州、アッサム州の中でも特に医療へのアクセスが困難な地域を中心に巡回し、結核検診を行いました（例えばアッサムティーで有名なアッサム州では、紅茶農園

の労働者を対象にした検診を行いました)。第2フェーズでは、約500人の陽性者を発見し、適切な医療に連携する事ができました。

そして、2023年11月から開始した第3フェーズでは、新たに200万人への啓発活動を目指して、グジャラート州でのX線撮影装置を活用した結核検診を推進しています。2024年9月のフェーズ終了時までには、2万人以上へのX線検査が行える見通しです。この第3フェーズは、経済産業省予算により公募された令和5年度「ヘルスケア産業国際展開推進事業」に採択され、結核予防会の皆様にもご協力をいただきながら推進しています。特に国際部の岡田医師や小野崎医師には、合計で5回もインド現地に同行いただき、現地医療スタッフの指導など全面的にサポートいただいています。本活動は医療の行き届かない僻地にて行いますので、毎度インド国内の飛行機を乗り継ぎ、更に車で往復10時間かかるような地方部までご同行いただく必要があるのですが、「同国の結核終息を一日でも早めるためならば」といつも快く引き受けていただいています。



巡回検診用に仕立てた車両。携帯型X線撮影装置や遺伝子検査用のPCR検査装置を運搬する



グジャラート州にて行ったキックオフセレモニーの様子(2023年11月)



巡回検診用車両の内部でX線撮影の様子

インドは世界で最も結核罹患者が多く、2022年の結核による死亡者数は約34万人と推定されています(Global tuberculosis report 2023参照)。同国政府は、2025年までの同国における結核終息を宣言しているものの、村落では約4割の結核患者さんが適切な診断を受けられずに生活が続いている状況です。結核の感染拡大や重症化予防による同国国民の健康づくりのためには、これら「未診断者」に対するスクリーニング検査により漏れなく早期に罹患者を把握し、適切な医療に繋げること(早期診断・適正治療)が重要です。

上述の通りWHOは2021年、結核のスクリーニング検査方法として、従来の喀痰検査に加え、X線による画像診断およびAI技術による診断サポートを推奨しました。一方で、インドの地方部では未だに「安定的な電力供給」、「X線検査用の検査室」など設備面の整備が難しく、結核検診の文化が行き渡っていない状況です。

また、電力インフラや機材の普及課題をクリアできたとしても、「X線画像の適切な読影やPCR検査ができる医療人材」の確保など、まだまだ多くの課題があると実感しています。今回、現地での活動を視察いただいた結核予防会の先生方からも、現地医療スタッフのX線撮影技術(被写体の肩甲骨が肺野に被らない姿勢を維持しながら、大きく息を吸って止める、といった指示を行うことなど)や、PCR検査用の喀痰検体を取り違えないような管理手法、医療スタッフの感染防止対策など、多くの観点でアドバイスをいただき、早速現地での活動の改善に取り組んでいます。

富士フイルムグループは今後も、医療機器メーカーとして機材を販売するだけでなく、インドでの活動のように、結核終息に向けた諸課題の解決に尽力していきます。🐶

痰壺省令から始まった結核対策

結核予防会アーカイブ委員

青木 純一

痰壺省令とは

日本における本格的な結核対策は、1904（明治37）年2月の内務省令、「肺結核予防二関スル件」からである。第一条で「学校、病院、製造所、船舶発着待合所、劇場、寄席、旅店其の他地方長官の指示する場所には適當箇所に唾壺を配置せよ」と定めるこの省令は、痰壺の設置、患者の消毒と隔離を義務づける簡単な対策で、その内容から痰壺省令または痰壺条令とよばれた。同年7月にロンドンで開催した萬国結核会議の決議条項をみると、第1に「結核病者の喀痰は人より人に結核病を伝える主要の媒介物であり、有病者が^{みだ}に痰沫を喀出することを防止しなければならない」、第2に「病院及び診察所は肺癆患者に結核予防の要点を記載した訓諭書を与え、また痰壺の適当な使用法を指示せよ」^{注1}とある。この頃の結核対策の柱が喀痰の取締にあり、それゆえ痰壺の設置は万国共通の取組みとなった。

省令に寄せる人々の期待

省令公布の翌日、新聞は「結核予防」と題し「肺結核の伝染し易い近年、この病者が著しく増加したのは世人の均しく認めるところで、この制度は我国の公の衛生上の一進歩」であると評した。その上で、「^{みだ}に唾痰を吐くことは世界何れの国においても下層社会の常態で、東洋人は最もその悪習がある」。よって「国民は先づ自らこの悪習を改めなければ、省令に示す唾壺の配置は用を為さない」^{注2}と警告する。

ほかの新聞も論調は同じで、省令に強い期待を寄せる。ところが、記事には「肺病が遺伝病か、伝染病かについては今なおまちまちの議論がある」^{注3}とも伝えた。コッホ（R.Koch）による結核菌の発見から22年を経て、なお伝染病か遺伝病かの区別すら人々の中に定着してはいなかった。

雑誌に載る痰壺の情報

公衆衛生の普及をめざし設立した大日本私立衛生会がその機関誌に「結核病欄」を設けたのが1901（明治34）年、痰壺省令が公布される頃になると喀痰対策や

痰壺の情報を頻繁に載せるようになる。たとえば痰壺の素材は陶磁器、ガラス、金属など多彩で、製造元も素材や地域で異なる^{注4}。商品としての痰壺が注目され、「東京の山○商會が発売した衛生痰吐壺は円筒形で外部は全て金属で、内部には硝子の壺を入れ、底板縁に^{こうかん}横杆装置があり、横杆の一端を踏めば、蓋が開き、また放せば自然に閉蓋する」^{注5}と宣伝する。

痰壺は個人と公衆用とではその用途が異なる。雑誌は痰壺の素材や形状、堅牢さや安全性、喀痰処理の容易さ、コストといった観点からその性能を繰り返し記事にした^{注6}。また、当時の療養書も「痰壺に必要な点は破損の恐れがなく、底部が広くて転倒しにくく、消毒洗浄に便利なもの」^{注7}を推奨した。痰壺の中には個人向けとして携帯痰器もあった。安静療法の提唱者、ドイツ人医師デッドワイレル（P.Dedttweiler）が使用する痰壺は、片手で使用できるコンパクトな形状で、痰器の底のキャップを開いて喀痰を捨て、さらに洗浄もしやすい仕組みであった（図1）。

痰壺は喀痰対策の要として20世紀の終わり頃まで各地の学校、映画館、駅ホームなどで見られた。

追記 我が国では、前述の通り痰壺条令といわれる場合もあるが、正しくは痰壺省令であろう。

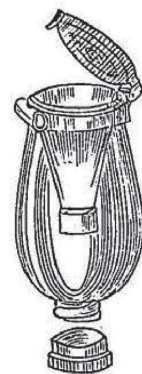


図1. デッドワイレル愛用の携帯痰器

註)

注1『大日本私立衛生会雑誌』第221号

注2『東京日日新聞』1904（明治37）年2月5日

注3『読売新聞』同日

注4 前掲雑誌、第253号

注5 前掲雑誌、第249号

注6 前掲雑誌、第250号

注7 石神亨『通俗肺病問答』丸善株式会社書店、1902年

さつませんだい 鹿児島県薩摩川内市の平佐焼の「痰壺」の寄贈に際して

結核研究所図書室

結核予防会アーカイブ委員 佐藤 和美

昨2023年（公財）鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターより問い合わせがあった。「令和3年度に薩摩川内市で平佐焼窯跡群¹⁾の発掘調査を行い明治以降の近代の民間経営磁器窯跡で、窯業関連施設がまとまって検出された。その中で工房跡・物原から「痰壺」が20点ほど出土した。諸点について知りたい。

1) 明治37（1904）年に出された「肺結核予防に関する件（痰壺条令）」と地方窯である平佐焼窯跡群が痰壺を製作した時期が重なるのか、2) 痰壺の製作・販売や流通網がわかるか、3) 大規模窯業地である肥前（有田・波佐見）では痰壺は見られていないので、平佐焼のような中小規模窯業地が大規模窯業地との競合を避け、棲み分けを図る一つの事例として捉えられるか。」

これまで結核研究所図書室には、故小松良夫氏の「杏結核資料館」より寄贈された痰壺が二つある（写真A）。陶器製で蓋がすり鉢のようになっていて真ん中に穴が開いている。

上記の質問に対し、図書室としては痰壺に関する論説は、青木純一著「結核の社会史」、御茶ノ水書房「（七）喀痰p.80-81」、および、公衆衛生誌の青木正和論文²⁾があったが、上記すべての質問に答える資料は見当たらなかった。ただし、青木純一氏からの助言として「痰壺条例の前後から、大日本衛生会雑誌などでは、痰壺を宣伝する広告があった。そこから販売会社や生産地を明らかにすると、新しい発見があると思われる。製

品に棲み分けという仮説も検証に値する。」というコメントも紹介した。また可能であれば結核予防会TBアーカイブ資料として、出土した痰壺の一部寄贈もお願いしたところ、幸いなことに上記埋蔵文化財調査センターより、今年、出土痰壺4点（完形上下セット2点、欠損上下セット1点、下のみ1点）をご寄贈いただいた（写真B）。その発掘調査報告書には、「痰壺は、本窯跡の特徴的な生産品の一つと考える。明治37（1904）年に導入された酸化クロム（緑色顔料）を主に用いて痰壺に染付をしていることから、本窯跡で明治37年2月の痰壺条令公布直後に痰壺を生産し始めた可能性がある。また大規模窯業地の肥前では痰壺は確認されておらず、平佐焼のような中小規模窯業地が大規模窯業地との競合を避け、棲み分けを図る一つの事例の可能性もある。」と当方のコメントも取入れて記されている³⁾。

結核予防会TBアーカイブ委員会では、上記センターに深謝するとともに、今後の貴重な展示資料として保管し、活用させていただきたいと願っている。

注1) 平佐焼窯跡群：鹿児島県薩摩川内市天辰町皿山の川内川左岸、河口から上流の上床山に位置。安永5（1776）年、平佐郷白和に最初の窯が開かれたが閉窯。その後平佐郷領主が天辰の皿山に窯を開き、肥前有田の陶工を招き磁器生産を始めたのが平佐焼の起源。

注2) 青木正和：「わが国の結核対策の歩み」（https://www.jata.or.jp/rit/rj/2010_1.pdf）

注3) 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2024『平佐焼窯跡群（松山・柚木崎窯跡）』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（504）（<https://www.jomon-mori.jp/wp-content/uploads/2024/05/H46001-3-0054.pdf>）



写真 A. 痰壺 A

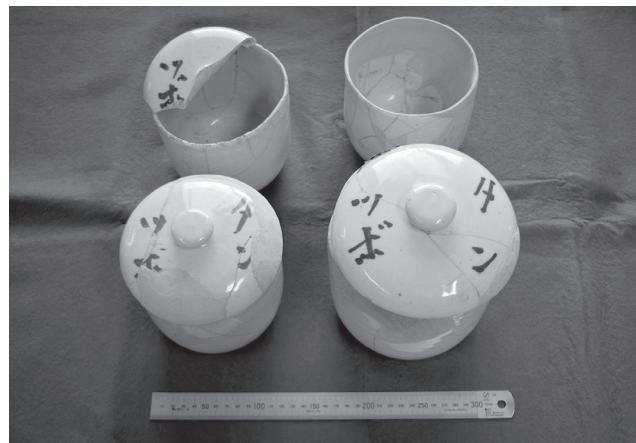


写真 B. 痰壺 B

ずいひつ 結核と「私」

大阪府結核予防会

顧問 増田 國次



「私」は昭和17年（1942年）9月2日にこの世に生を受けた。この頃の結核死亡は15万人ほどで、人口10万対死亡率は200を超えていた。ご存じのように最大の死亡率は大正7年（1918年）257.1で、140,747人であった。わが家へ結核菌がやってきたのは、多分招集された父が、幸い戦地へ行くことはなかったが帰宅したときに持ち帰ったものと思われる。軍隊という閉鎖集団で感染を受け、戦後発病し、療養生活を余儀なくされていた。療養所へ見舞に行ったことを当時小学1年生の「私」は絵日記に書いていた。しかし療養の甲斐なく昭和24年12月に帰らぬ人となった。

昭和25年（1950年）結核死12万人以上、死亡率146.4

その直前、「私」は1年生の秋に胸膜炎を発病、3か月以上学校を休んだ。幸い叔母が医師で胸水を抜いてもらった記憶がある。当時としては女性で医師は比較的珍しかったと思われる。「私」の母も薬剤師として薬局を開業していた。増田家は代々大阪・道修町で薬種商を営んでおり、7代目の祖父は娘二人を医薬の方面に進ませたものと思われる。祖父はその姉とともに明星派の歌人であり、漢詩にも造詣が深かった。その大伯母は増田雅子と言い、与謝野晶子・山川登美子とともに歌集「みだれ髪」を出している。

「私」にはそのような文才はなく、小学校・中学校・高等学校と進み、進路を決める時に医学を目指すようになっていた。

昭和35年（1960年）結核死亡約3万2千人、死亡率34.2と改善が見られていた

大阪大学医学部では学部2年次の細菌学の実習の一環として、微生物病研究所の各部門をめぐるカリキュラムがあった。実習は別の部門へ行っていたが、結核病理学部門で学生を募集しているとのことで誘われ参加した「私」にとっては今に続く始まりであった。

昭和40年（1965年）死亡数22,366人、死亡率22.8、罹患数304,556人、罹患率309.9

昭和42年（1967年）3月無事大学を卒業し、インターンとなるはずが当時のインターン闘争の影響で、青年

医師連合（青医連）として、自主的に研修を行うようになっていた。翌年医師国家試験があったが、ボイコットし、「私」は大学院へ入学した。堀三津夫教授の微生物病研究所結核病理学部門である。この時の研究テーマは抗結核薬のヒドラジッドによる肺腫瘍の発生だったが、マウス肺に腺腫はできるが、悪性化は見られなかった。その後、薬剤耐性の研究によって学位をいただいた。

昭和50年（1975年）4月より結核予防会へ入職した。

昭和50年（1975年）結核患者108,088人、罹患率96.6、死亡数10,567人、死亡率9.5と10以下

入職初期の頃は、学校や職場の健康診断、その後徐々に胸部の読影、消化器、特に胃の健診・読影に従事した。その中で記憶に残る症例は、胃の間接撮影像から発見した30代男性の甲状腺がんであった。100mmの胃造影フィルムで胃の横に粒影像が複数見られた。胸部フィルムは異状なしの判定であったが、よく見ると同様の陰影があった。呼び出しの上、紹介し、精密検査の結果、甲状腺がんの肺転移と診断され、甲状腺の切除がなされた。その後も元気でよかった症例である。

初期の頃の胸部間接撮影像の読影では、約400人の高校生で何人かの結核と思える発見があった。その後徐々に減少し、一人の発見もない状態に改善してきた。結核疑いより、脊柱側弯が目立つようになった。学校健診でも脊柱側弯への関心が高まってきた時代である。現在に至る結核の減少はご存じのとおりである。

結核予防会での日常業務とは別に、保健所での結核審査協議会への出席や、所長として、理事長としての業務も増加してきた。さらに、地元医師会活動では開業医ではないが理事・副会長を歴任し、会長を3期務めさせていただいた。このような経歴の「私」は令和4年秋に旭日小綬章の荣誉に浴した。これもひとえに結核予防会一筋、50年にならんとする勤務の賜物である。感謝。

令和4年（2022年）新登録患者数10,235人、罹患率10万対8.2 🐼

ミャンマーコミュニティと連携した 結核健診・健康相談会の取り組み

結核研究所

臨床疫学部主任

りさんいん
李 祥任



私は、2021年にベトナムコミュニティと Migrant Health Action Network (MiHAN) を立ち上げ、研究事業の一環で、ベトナム移民のための結核の啓発と早期発見を目的とした健康相談活動に取り組んできています。ベトナムコミュニティが主体的に取り組むこのような活動を、他国出身の移民コミュニティにも広げられないかという、各方面の方々からのご意見をいただき、ミャンマーコミュニティと連携する運びとなりました。

ミャンマー人は、2023年末における日本在留外国人人数の中で、国籍別には8位ですが、この10年間でその数は増加傾向にあります。そして、2022年外国出生結核患者のうち、6番目に多くなっています。日本に住むミャンマー人の中には、難民認定者または認定申請中の方も多く、日頃の定期健診や医療へのアクセスが容易でないため、結核の早期発見も遅れる傾向があります。

こうした経緯から、ミャンマーコミュニティを含む関係者、保健医療関係機関との準備を踏まえて、2024年1月に都内でミャンマー人のための無料健康相談会と、東京都保健医療局が主催する無料結核健診を合同で開催いたしました。準備過程においては、日頃からミャンマーコミュニティと信頼関係を築かれている日本の関係者の方々が、ミャンマーコミュニティと私達をお繋ぎくださり、ミャンマー人の方が受診しやすい会となるようコミュニティの方達と共に運営の工夫点を検討しました。本会は、外国出生者・移民の方における早期受診の動機づけを高めるために、健康相談会の一部に胸部レントゲン検査による結核健診を位置付けた点と、ミャンマー語の医療通訳者の配置、ミャンマーコミュニティから運営の協力をいただく実施体制にしました。ミャンマーコミュニティからの協力者達は、事前にミャンマー人向けに Social Networking Services (SNS) 上や街頭で、この相談会の周知に熱心に努めてくださいました。

今回は、ミャンマー人の集いが開かれる会議室の隣の会議室を借りて、本会を実施しました。このように

外国人向けの結核健診をいつ、どこで実施するのかは、開催の計画時に一番大事なポイントです。ミャンマーコミュニティからの働きかけもあり、当日は午後のわずか3時間の開催にもかかわらず、予想を超える多くの方に受診いただきました。結核健診の受検者は31名(うち、要精検者0名)、健康相談会の受診者は31名でした。健康相談会では、必要な方向けに後日医療機関を受診するための紹介状をお渡ししました。健康相談の一例としては、顕著な体重減少があるため、がん検診を希望する方からの相談や、胸の圧迫感が続くがどこに受診すればよいかかわらず、かつ日本語で受診することが困難な方からの受診先の相談などがありました。ミャンマー人医師ボランティアの方も母国語で健康相談に対応してくださったことで、受診者が症状の相談だけでなく、仕事に疲れたと本音を表出された方などもありました。移民の方にとって、個々の健康を取り巻く生活環境を含めた話題が表出しやすい環境が作れたと思います。本会の運営をご支援くださった全ての関係者・関係機関の皆様に感謝申し上げます。

今年度は、都内で6月に開催されるミャンマーマイイベントにあわせて開催する予定です。屋外での開催のため、より多くの受診者数が予想されており、ミャンマーコミュニティからのボランティア数も拡大し、日々準備に励んでいます。外国出生者・移民を対象とする結核の早期発見の取り組みのために、引き続き移民コミュニティをはじめとする多分野・多職種間の連携を大事にして取り組んでいきたいと思っています。🐼



東京都結核予防会の検診車

明治村北里研究所本館・医学館内 展示パネルリニューアル・トークセッション開催

北里研究所本館・医学館 結核予防会展示パネルリニューアル

北里研究所本館・医学館の常設展示がリニューアルされ、5月12日（土）に公開されました。これに合わせて、研究所内に展示していた当会パネルを一新しました。新しいパネルでは、当会と北里博士との関係・結核とはどのような病気か・日本と世界における結核の課題等に焦点をあてて内容を再構築しました。また、公開初日の5月12日にオープンセレモニーが開催され、小林事業部長（当時）が出席しました。



北里研究所本館・医学館



当会パネル。2部屋に
合計10枚を展示

トークセッション「感染症との闘いーこれまで、そしてこれからー」

5月16日（木）に明治村・呉羽座でトークショーが開催されました。尾身理事長、明治村村長の阿川佐和子さん、館長の中川武さんが登壇し、結核やコロナについてお話しました。約140名の来客がありました。
（事業部普及広報課 光野利枝子）



左から司会者・明治村館長の中川武さん・尾身理事長・
明治村村長の阿川佐和子さん



終了後、募金箱を設置し、複十字シール募金を行った



会場「呉羽座」。江戸時代の芝居小屋で、歌舞伎や落語が演じられた。
客席は枡席になっている



令和 6 年度 高額寄附をいただいた方々からのメッセージ

複十字シール募金と本会事業資金に多大なご協力を賜り、
誠にありがとうございました。ご寄附をいただいた方々から
メッセージをいただきましたので、ご紹介いたします。



複十字シール募金

吉田 万里子 様

父が亡くなって23回忌、母が亡くなって10年という節目の年を迎えました。

その節目に、相続した土地を売却したことで、その売却益の一部を両親への供養として寄附したいと考えました。

実は、両親は長年に渡って結核予防会へ寄附していました。父は里子として育ち、実父の実家は開業医だったのですが、結核を患って立ち行かなくなりました。

又、父を育ててくれた里親（実父の弟）は、結核を患って、亡くなりました。その経緯から、父は結核予防会の活動に関わるようになったのです。母も父の意志を受け継ぎ、結核予防会の活動に賛同しました。

そんな両親の姿を見て、私は10年前に母が亡くなったことをきっかけに、結核予防会への寄附を始めました。

今回は特に、両親の意志を受け継ぎ、結核予防会の活動を通じて、結核撲滅に貢献したいという思いで寄附しました。

少しでも多くの人々の命が救われ、健康であることに繋がれば幸いです。

事業資金

太田 正樹 様

先般長らく病に臥せっていた母が88歳で世を去り、その遺品を整理していたところ古い複十字シールの束が出て参りました。生前母は青木正和先生（元結核予防会会長）のファンであり、折に触れシール募金をしていたことを思い出しました。そこで母の遺志を汲んで遺産の一部を御寄附申し上げることと相成りました。

本邦においては、もはや結核の流行は下火となり、結核は主要な感染症ではないかの如き取り扱いですが、一方世界的には結核はいまだ流行しており、私が昔勤務していたアフリカ諸国では、エイズウイルスのまん延と相まって、多数の患者が発生していると聞き及んでおります。

わずかな募金ではありますが、アフリカの人々に届き、結核の流行抑制の一助となることを祈念致します。

2023年度複十字シール運動報告

結核予防会事業部

募金推進課長 佐藤 奈津江

複十字シール運動は、結核を中心とした胸の病気をなくして、健康で明るい社会をつくるための運動です。その実現のために、毎年8月1日から12月31日を複十字シール運動期間と定め、募金活動と普及啓発活動を行っています。2023年度も結核予防会都道府県支部並びに公益社団法人全国結核予防婦人団体連絡協議会（以下、婦人会）の皆様には多大なご協力をいただき、複十字シール運動を継続することができました。ご支援・ご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

★2023年度募金成績

2023年度、支部・本部に寄せられた募金の総額は1億7,777万9,971円でした。支部を通して寄せられた募金は1億1,498万5,357円で、婦人会を通じた募金が36.4%で最も多く、次に多かったのがダイレクトメールによる郵送募金で、25.4%を占めました。

本部に寄せられた募金は6,279万4,614円でした。郵送募金では新しい法人名簿を購入し、継続協力者及び法人と合わせて32,090件にダイレクトメールを発送しました。

★募金の使い道

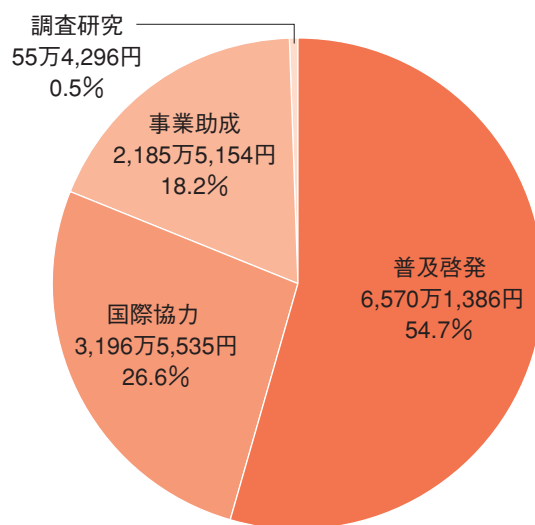
寄せられた募金から、シール・封筒・広報資材等の製作費、運搬費等の諸経費を除いた1億2,007万6,371円の使い道は図の通りです。結核予防の広報資材や教育教材の作成および研修会や結核予防全国大会の開催等普及啓発に54.7%、アジア・アフリカの開発途上国の結核対策等の国際協力に26.6%、全国の結核予防団体等の活動費に18.2%、結核の調査研究に0.5%を使わせていただきました。

★支部の取り組み

新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、4年ぶりにキャンペーンを再開した支部もありました。コロナ禍前の活動の再開と共に、コロナ禍で培われたデジタルサイネージによる広告やSNS、パネル展示など、非接触・非対面型の活動についても引き続き継続し、

多様な啓発活動が展開されました。

また、35支部から都道府県知事表敬訪問のご報告がありました（複十字No.412, No.413）。特に、2023年度の複十字シールは全国の郷土玩具や伝統工芸品がデザインされていたこともあって、岩手県の「チャグチャグ馬コ（ちゃぐちゃぐうまっこ）」、栃木県の「黄鮒（きぶな）」、山口県の「金魚ちょうちん」などが知事表敬で話題になり、大いに盛り上がったという嬉しいご報告をいただきました。



募金総額 1億7,777万9,971円
事業費 1億2,007万6,371円
(諸経費を除く)

2023年度募金の使途内訳



ショッピングセンターでの啓発活動（岐阜県支部）

★本部の取り組み

2023年度のシールぼうやと仲間たちをデザインした広報資材は支部からの希望が多かったボールペンとA4のクリアファイルを作成しました。クリアファイルは単価を抑えるため、婦人会と共同で作成しました。

また、4年ぶりに厚生労働大臣表敬訪問を実施いたしました。当日は昨年9月に新設された健康・生活衛生局感染症対策部の佐々木部長にお会いし、感染症対策課の荒木課長をはじめとする職員の皆様にも多数ご出席いただき、改めて官民一体となって結核対策に取り組んできた歴史を実感しました。（複十字No.414）。

・寄付型自動販売機

本部と支部の募金額は1,812,111円となりました。本部で新たに設置された寄付型自動販売機は3台でした。コロナ禍以降は営業の自粛などにより一桁にとどまっています。

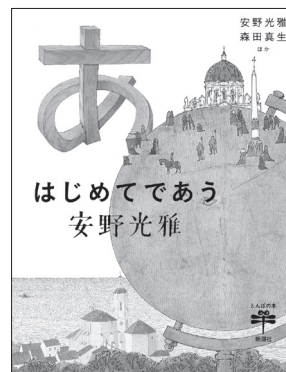
・寄附付きジェラート

お中元等、季節の商品に加えて都内スーパーマーケットでの常設販売が始まりました。販売店等につきましてはホームページでお知らせしています。

・チャリボン（古本募金）

季節ごとに寄附金上乘せキャンペーンを行っておりますので、古本を処分する機会がございましたら、是非ご協力いただけますようお願いいたします。

★『はじめてであう安野光雅』



最後に安野先生の多彩な活動を紹介した書籍を紹介させていただきます。「切手とシールの小宇宙」というページに複十字シールが掲載されています。安野先生には2002年から2018年までの17年にわたりデザインを担当していただきました。この本は複十字シール運動の記録としても貴重なものになると思います。

引き続き、ご意見・ご指導賜りますようお願い申し上げます。🐼



安野光雅先生による複十字シール（2014年度）



ジェラートのイメージ
（デパートのお中元カタログより）

多額のご寄附をくださった方々

〈指定寄附等〉(敬称略)

鳥野知寿, 滝田文雄, 栄研化学株式会社, 日本ピー
シージー製造株式会社代表取締役社長 貝谷伸

〈複十字シール募金〉(敬称略)

岩手県— (団体) 真山池田医院, 新岩手農業
協同組合, 坂の上野田村 太志クリニック, 寿広,
北関東メディカルサービス, 共立医科器械, 岩手
県対がん協会, 快老苑金ヶ崎, 千葉耳鼻咽喉科
医院, 未来の風せいわ病院, 岩手自動車電機,
白井循環器呼吸器内科, 滝沢中央病院, 日新堂
(個人) 石川洋子, 鈴木俊一

広島県— (団体) 広島市地域女性団体連絡協
議会

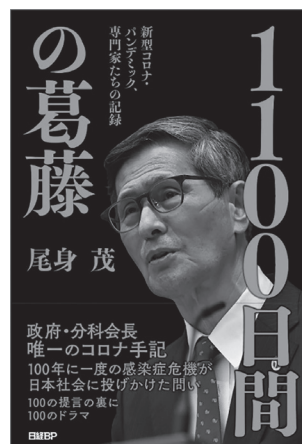
本部 (令和6年度ご寄附分) — (団体)

すみれ, シュール, 名和医院, 神津小児科医院,
志木北口クリニック

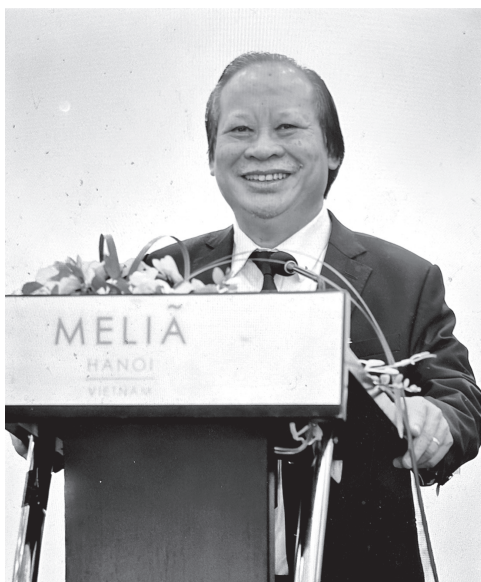
(個人) 高良義雄, 守屋俊晴, 各務克郎, 横田孝一,
宮本修治, 高橋智行, 笹本和広

尾身理事長著書 科学ジャーナリスト賞優秀賞受賞

尾身理事長の著書「1100日間の葛藤 新型
コロナ・パンデミック専門家たちの記録」が
科学ジャーナリスト賞優秀賞を受賞した。こ
の賞は日本科学技術ジャーナリスト会議が主
催するもので、尾身理事長が専門家として関
わったコロナ・パンデミック対策の出来事や
判断をつづった詳細なメモが後世への貴重な
「記録」とであると評価された。また、この書
籍の印税は、当会の結核予防普及啓発活動等
に活用している。



第27回秩父宮妃記念結核予防功労賞世界賞受賞者のご紹介



グエン ベト ニュン
Nguyen Viet Nhung (医師)

ベトナム結核プログラムの中核スタッフとして長年活躍して
きたが、とくに2013年から国立肺病院と結核プログラムのダイ
レクターとして、発展著しいベトナム結核対策を牽引してきた。
結核医療サービスを診断・治療の両面で近代化する一方、2回
の全国有病率調査や積極的な患者発見(結核検診)手法の実践
などでは、海外の諸機関と協力し、他国のモデルともなる成果
を上げてきた。国際的にも、WHO本部の結核対策戦術技術諮
問会のメンバーや各種技術委員を務めるなど、結核高まん延国
を代表する立場からの発言を続けており、後進の指導・育成も
含め今後一層の活躍が期待される。

「複十字」へのご意見をお聞かせください

記事へのご意見、ご感想等を当会へ郵送いただくか fukyu_hq@jata.or.jp にお送りください。
内容の充実に向けて活用させていただきます。

2024年(令和6年)7月15日発行

複十字 417号

編集兼発行人 永田容子

発行所 公益財団法人結核予防会

〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町1-3-12

電話 03(3292) 9211(代)

印刷所 株式会社マルニ

〒753-0037 山口県山口市道祖町7-13

電話 083(925) 1111(代)

結核予防会ホームページ

URL <https://www.jatahq.org/>

〈編集後記〉

編集中心、キャバツ高騰で大ショック。早く元の値
段に戻ることを祈っています…。

本誌は皆様からお寄せいただいた複十字シール募金の益金により作られています。

令和6年度複十字シールご紹介

複十字シール運動は、結核や肺がんなど、胸の病気を
なくすため100年近く続いている世界共通の募金活動
です。複十字シールを通じて集められた益金は、研究
健診、普及活動、国際協力事業などの推進に大きく役
立っています。皆様のあたたかいご協力を、心より願
いいたします。

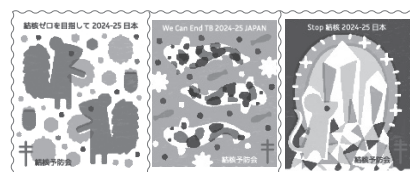
募金方法やお問い合わせ: 募金推進課

結核予防会 募金

検索

またはフリーダイヤル: 0120-416864 (平日9:00~17:00)

令和6年度複十字シール



石川県支部に胸部検診車（宝くじ号）導入

令和5年度の一般社団法人宝くじ協会の公益法人助成事業において、結核予防会を通じ、胸部検診車を整備する運びとなり、令和6年5月27日に本部から石川県支部に納車・引き渡しを受けました。

この検診車は、車両を小型化しつつ乗車定員を増やし健診スタッフも同乗し移動できるよう工夫されています。また、放射線被ばく量の軽減を目的に、最新のフラットパネル方式のX線撮影装置を搭載し、新型コロナウイルス感染症や季節性インフルエンザなどの感染予防策として、車内換気扇、空気清浄機の設置や内

装の特殊コーティングを施し、安全な健診を提供できるよう配慮しました。

これにより医療機関が少ない半島振興対策実施地域（能登）や、県内全域の道路の狭い地域の健診会場への巡回効率を高め、安全な健康診断の機会を提供できるようになりました。

本検診車の導入により、結核・肺がん検診の受診率の向上と、疾患の早期発見をすることで、石川県民の健康増進と疾患予防に寄与して参ります。🍷

（公益財団法人石川県成人病予防センター）



禁煙ポスターのご案内



新しい禁煙ポスターが完成しました。本年の世界禁煙デーにおけるWHOの標語は、「Protecting children from tobacco industry interference」です。

禁煙ポスターをご希望の方は、①送り先の郵便番号・住所・氏名・電話番号と②必要部数をご記入の上、当会普及広報課（fukyu_hq@jata.or.jp）にお問い合わせください。

*着払発送にて送料のご負担をお願いいたします。
ポスター本体は無料です。

*部数に限りがありますので、在庫がなくなりました場合はご了承ください。🍷

令和6年度 複十字シール

～自然との調和～

大型シール(24枚綴り)



今年のイラストの テーマ

日本には花鳥風月という美しい風景を表す言葉があります。「自然との調和」をテーマに生命を持つものたちが共に生きる姿をシールにしました。これからもずっと守っていききたい日本の美しい自然が描かれています。

小型シール(6枚綴り)



今年もイラストレーターのあさいとおる氏によるイラストです。美しい日本の自然と、そこに暮らす生きものたちを24枚のシールに描いていただきました。

それぞれのシールの中で自然や生きものたちが共存しながら、のびのびと生活していて、今にも動き出しそうです。

和菓子のような水中の鯉や温泉でくつろぐ猿と猪など、美しさとユーモアにあふれたシールになりました。

募金推進課